

111
下
8

館書圖京東				
三	八		三	
冊	號	架	函	類

波菜義臣傳

三

111
F
8

赤城義経伝巻之九目次

名雄與元寫號令お監書とあつうのびらひのてあひしよま并あはれ各心覺悟あはれし合書あはれあり

相林あはれお近吉嗜茶あはれ并あはれ大宮横川以術定あはれ新撰あはれ期事あはれ

書あはれお瑞光院あはれ并あはれ継あはれ玉あはれ垢あはれ小あはれ袖あはれ乃あはれり

夜封あはれ林あはれ集あはれ附あはれり

節制合書あはれあり

義経あはれお出あはれ入あはれおあはれ二あはれ周あはれ來あはれり



帝城後傳書九

自旅亭元字號令也... 各心无悟之令書之事

及三月十一日... 我臣等... 傳後之事

仇敵の... 毎朝日人... 勤勞も亦

言上も... 安奴婢... 乃知汝若

七... 懐中も... 教乃の

辱め... 恥は... 事は... せむと

新... 義英... 交く... せむと

遊... 犯... 教回... 事は

是... 附屬... 押... 所

其... 乃... 乃... 遣

頃... 心... 乃... 圖

此が御所の入り侍と既し十月七日八日の五日早余入
又之宛言令が毛は招く頼と一味遊利の哲徳又と書はし書
書よ田

一 冷光院様由る御書の上野分敷可付志志と侍者合合

衆及び此大狂痛者大衆心込敷仕人志相捨吐今尸合中
死相死の面と津霊魂可殺遊沖照臨人事

一 上野分敷由る衆は押迫働し後功後後可省之以上野
分敷平掃と者衆参回一箇日合衆可同前衆と衆働役
好事やる衆公志先後一車不可存元後一味合津為後
働役よ相首と衆法有る衆公事

一 一應各存家衆と合衆と合自分と合口坊人衆と
る衆公何と衆利と南法可尸合人志不快と庶衆有る

志とのとり究働と衆互し助合志と衆徒務利と合志
と專よと働事

一 上野分敷十分と討たると衆と一令と可通是博と上
野尸合敷と三衆と尸合衆と合衆と合衆と合衆と
助合と場と集可尸事

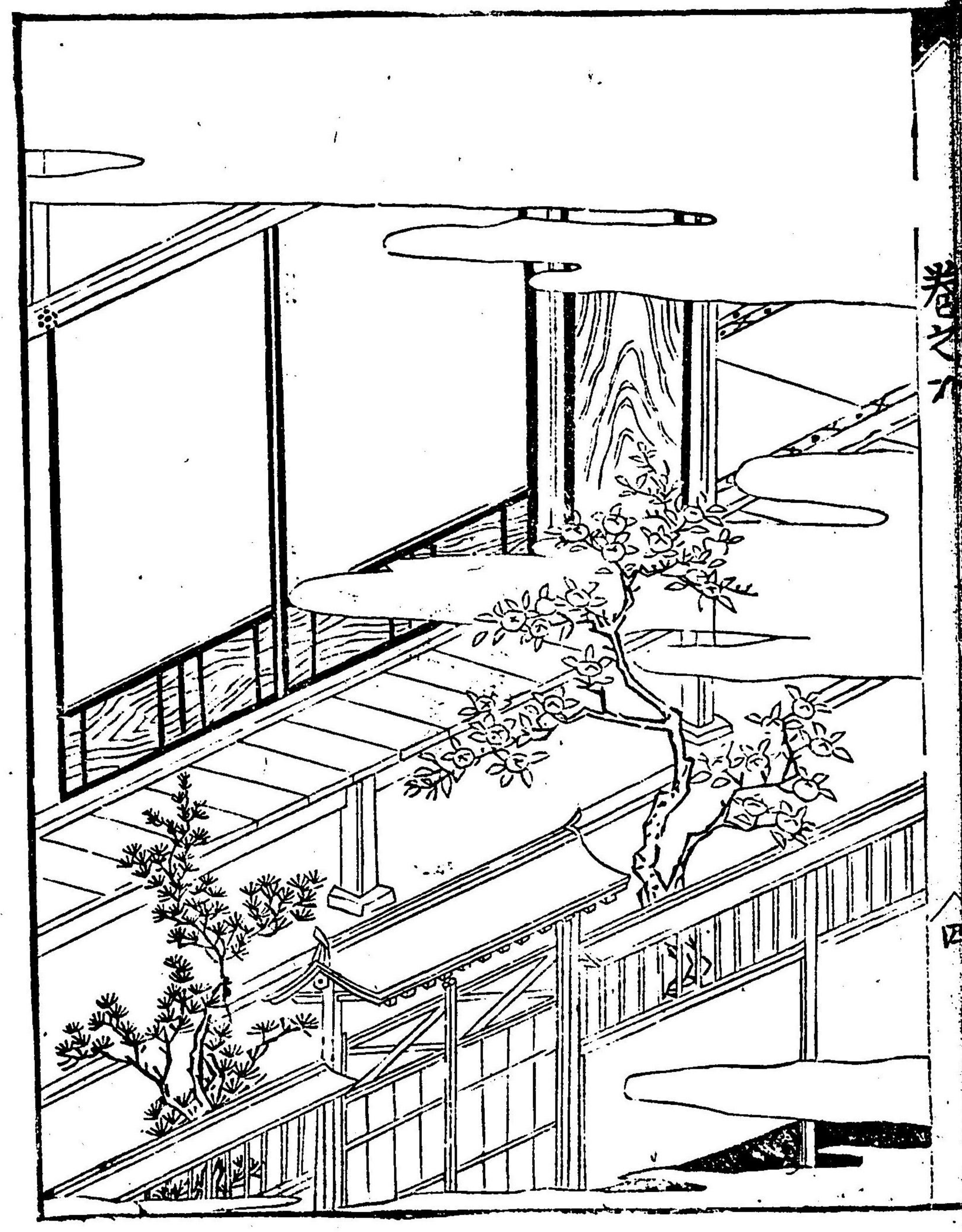
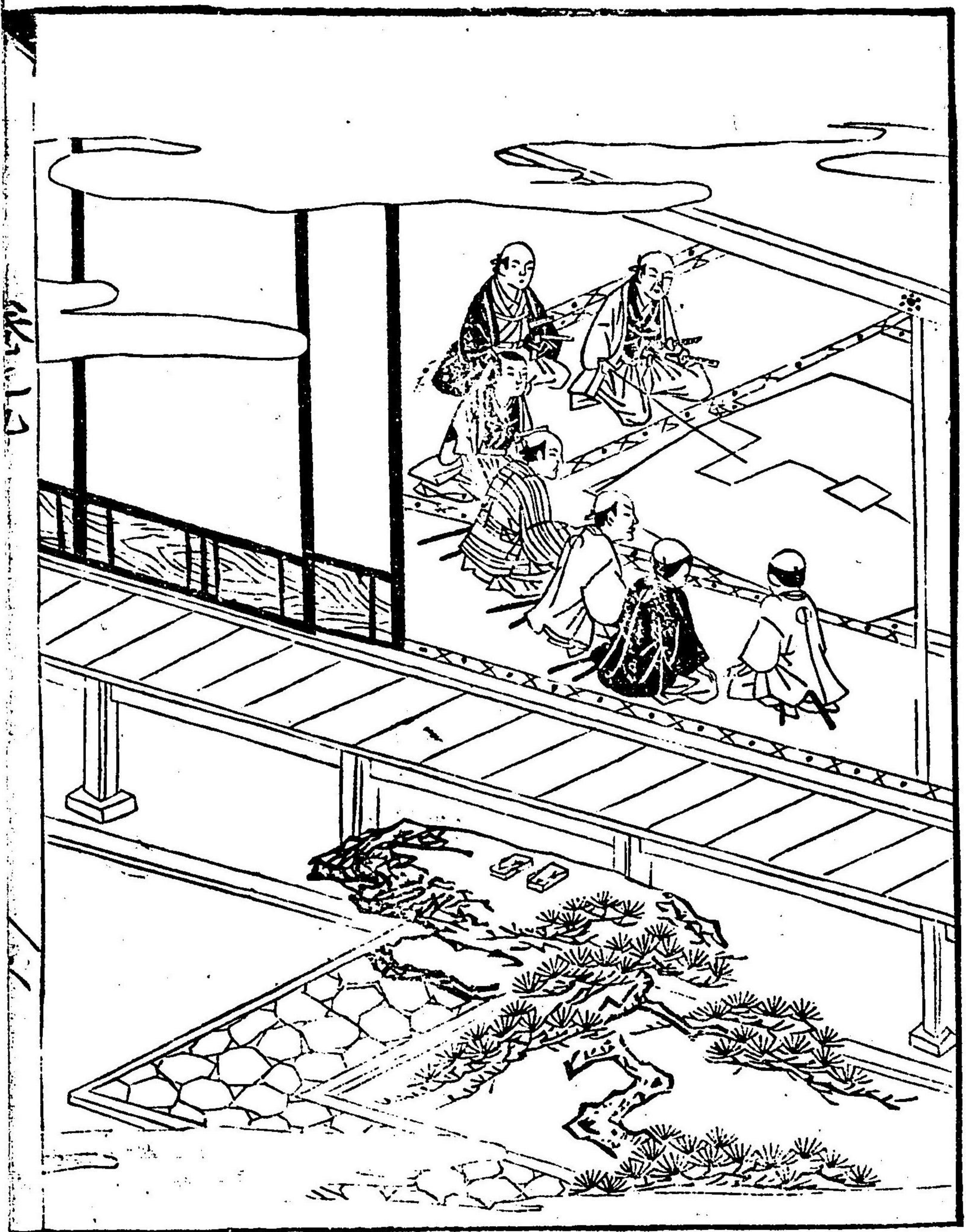
右田を條相衆と合此一大事衆能と可仕は法と以交衆
類と大狂痛と可為同公事

右於相衆と合以下祿文

人々心得と是書

一 定月相衆と合定公定衆目衆中惣衆と合衆公
三ヶ所と集可尸事

一 定日と合衆と合衆公別衆と可打事



卷之六

...とどけ逸足坂かへり飯より横川天乃寺へて
...乃のありさ中へ入らむひきりて雄よつげて結露乃の
...と天乃公おれどもかく乃でんれ赤粉の
...かすんべいをくはよ及人やひよよ是富松乃事
...さるるな—又或人云お林翁麻布乃後徳福月の
...あつてき法同邪我恨く運滞より中よ十三日の日
...係修飾して風景いすまじと云云後徳福乃と因
...乃の初へ先まじ麻布へ入ると云々

良雄後書お陽光院 并 結露坂小社より

夜燈乃日限豫定つらねが義士おのく法及古哉
...すく奴僕とかし老死と完じそそく去年赤徳福
...乃時用令死乃孫係教子あはれ是と書ひて我

...はつてはつて後が子孫後乃事とそ良雄が山科乃回

...乃亦家材徳乃教と法部—集り処の金去年三月

...今徳月中由よとて路とよ方三千両 四十余人各

...乃帳面法係とそ私勤とそとそ徳福乃夫人乃許へて後

...乃家叔又老親書子ありあはれ徳福乃飛んて道と書

...乃帳面とそめくあつてよそ徳福乃のよ中よとそ良雄の瑞

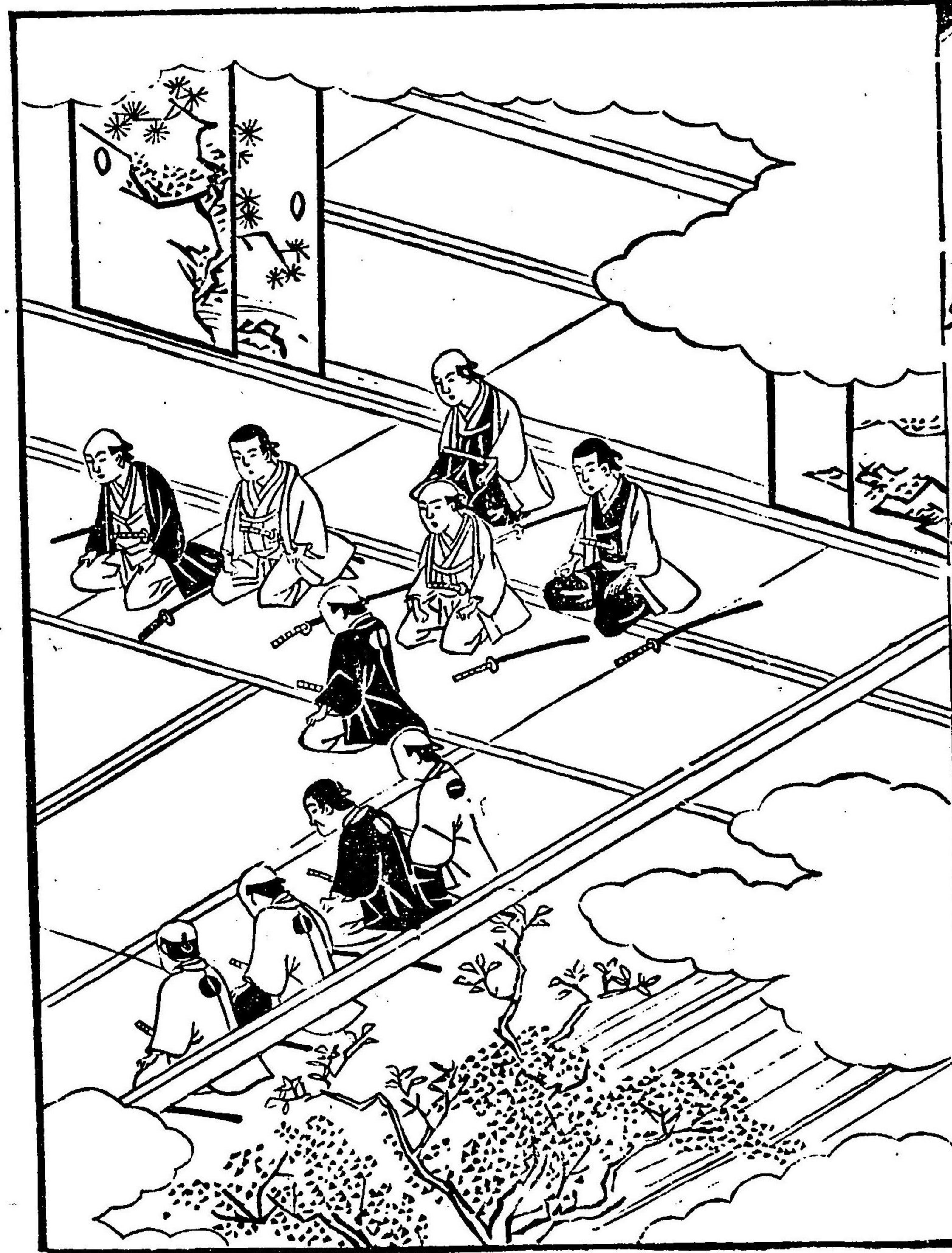
...乃既よ御書とそとそ書四十七人のあつて一つのみと書

...乃一旦目録乃孫係書言とそとそ約徳乃とそ書

...乃あつて一はあつて利大書とそとそ書料乃とそ又四十七人

...乃徳福乃の雜料等乃のあつておとそとそ金永を瑞

...乃徳院よ別びよ又徳福乃の小社云云法海をたよ托



巻之九

形く法をもあまらるる舞くよき飯を著るるに午店二
 月語勢をき傍がむ本名三日月杉中事決ぐ宅同不相生
 町前衆が家以に之をよむお家来場と定めまの刻に一宗
 一宗の諸集つららるる世帯のあはせに二ヶ所よおわくお家
 事決改めらるる今やなと時と用意せし事なわが一様の
 景色よ紅葉の黒や衣のね織よ白指よ心袖と襟と衣
 縫廻し大筋の両く胴行衣よ代りの改申の裡よ兜巻
 の新試器と金皮の袖下よ姓名の書きとらふ改法の内近
 改法何事ととぞ銘とりらるる今や今やの試よ習する
 一但衆の後の常立抱の抱申を老舞とよ大は程いとま
 且お衆とすお舞ならわが書え乃門前よおと各は舞と

冠一又敵を討たを縁ちよ引えらるる寺よおのくは
 一とて定む以は二十余アの在改元はよふ載とりのとも今よ裁きの
 子孫よまうしてす之且まはらよのりお改よかよよまは 依食の
 然そのへ上戸の酒よまご一子の申割とよあま抱へ三ヶ所
 集りべしと物しと二所よおのくおわ乃酒高あはゆは友よ
 堀ががあよの長旅乃隊下二十四人言し又お院が隊下五人
 ハ二つよ分せとてお聖と前衆がむへぞ集るらる初く金丸が書ハ
 女まごしと心割のあしと人への前途は脱せんとか陳の礼と
 月のくお衆見布かんとお菓子と一敵の首をたぬをさる
 ありやうよとてお衆の扱おとせんお鴨は包丁してお人
 各意を志改し一堀は勤むお旅と初として各階をなくお
 ありと堀をさるしとら堀がやらるお衆の極老の身あて
 履きよ瀧とよお衆とらるお心きよお孫お舞とら一睡しと進

時激しおきまぐべー冬にせむは酒公すとされ割派を有ハお
 さまぐべーとさく女き勝がまの我女かりんは字まあと二人よまき
 の梅鹿はさくせら（おんげん）とく（おんげん）熟睡せしは縁公と割派を有乃老
 人かりんおく子の中前也と割つらるる者めをくく三ヶ所を所
 立お小核へぞ集りりるゆくとゆくと金丸のまぐ睡さ
 めばなまは依友城を城の城丸十希とく二人の程子有と二可う
 なるらるるが二人のまどとて我古のが足試めてなり程をかく死
 ちりりるが女父乃のく（おんげん）熟睡するはんく子割派のゆりて
 五人のまぐ金丸は起し一た名もと助くおまをぞ改めりる金
 丸（おんげん）冷然飛舞しりるがまぐ用とせし一短槍とれく試とる
 のゆりままぐまぐとて（おんげん）行七八寸切くすそる実なくしてゆり
 伏として城をまぐよ割入させ二三夜卓鳴し一使々と打殺ひまぐ

一よ本筋のゆり（おんげん）二人の程子よ助らとてを良の飯へとまぐゆり
 依友よまら飯者ちまの法行とまをありの香田ちたつが藤下乃射
 ち足能かりしがゆり照約乃尺よ入り今宵よとくまは
 餐せは香田が赤城乃新階のま有とまく片付けまありの香
 ちまのは事よ飯のませ乃刻むりよ城が家よまわりのゆり
 すとよかきせふとまておおじとま城のま高之は引るゆり
 人よまの吸相してそ途と送へてゆり一人世つると心よ
 かりりよとてを（おんげん）仕乃有りり引裂取ま有と一酒飲とてを
 一らるち飯とまを良の飯よまるとまを法士ををまよま
 入支門とくく（おんげん）入るる様ま有り一かきをまを
 せま人まおく（おんげん）美色乃人城制ひま飯かんとままは事ま
 伏支ま務乃まゆりよあまこと（おんげん）徘徊しとてゆりゆり

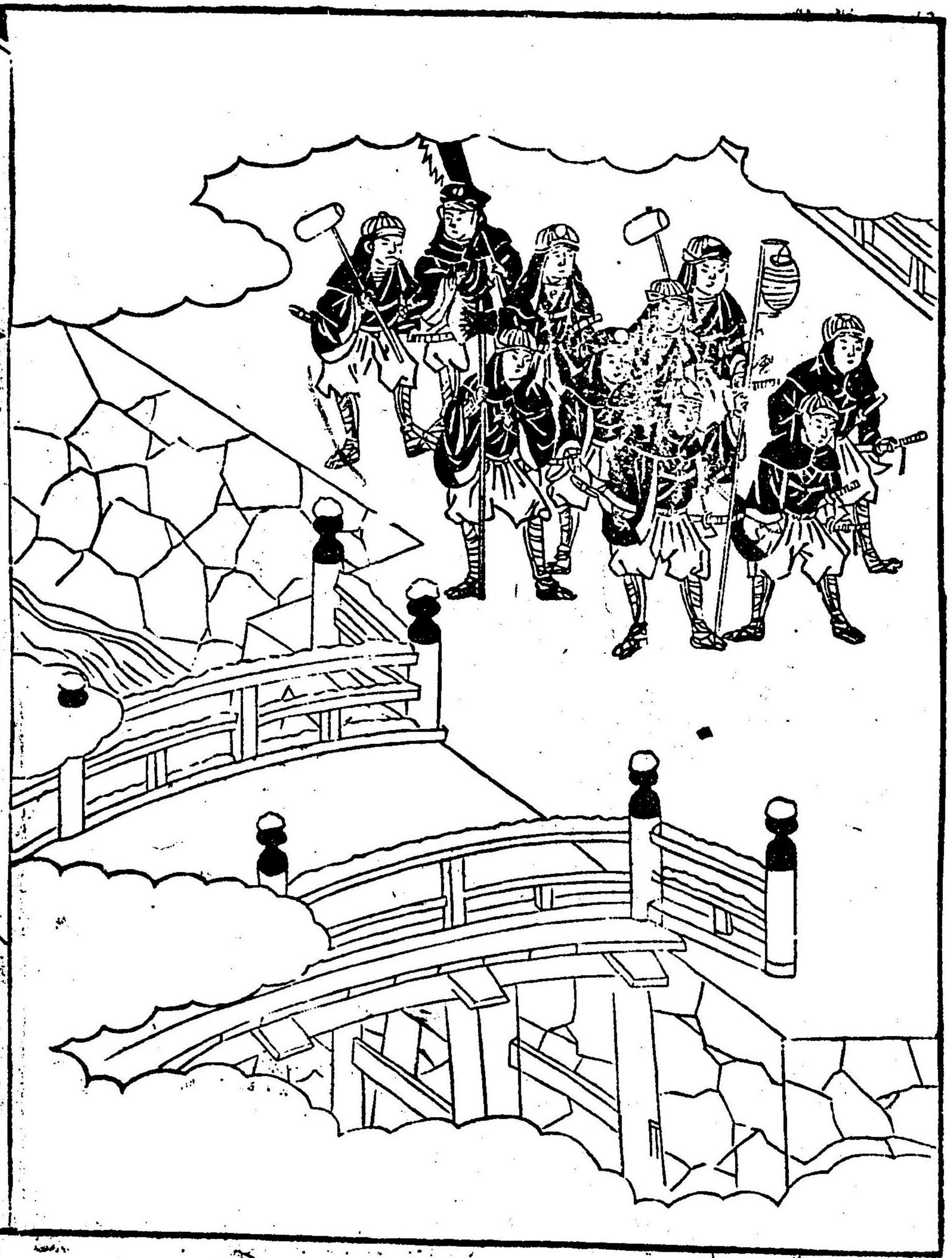
石坂系後傳卷之十

義太夫傳卷之十

考後より十六人乃意三ヶ所より由國橋より集りても麻焼方な
 惣へ列と云ひし院より世乃親よりぬ又法乃とて四十六人云ふ事
 又分て車組二十四人八ヶ所云々の①大石同義助原惣太屋之辰
 乃継久之次心附②家来助太屋③心園武林④七隆重⑤川同源又太屋乃房
 ⑥堀江孫三兼金丸松村森去崎入石隆重⑦三村波布左兵衛色帯⑧夫田お菊去
 妻⑨助成勝四郎九歩⑩武光貞因孫右衛門兼金⑪吉田沢太屋⑫高田之助
 八十六人考村小路もまた考⑬貝原孫左衛門友佐夫政右衛門七
 敷右様川島平宗村⑭遊乃友右衛門源光園野全太屋⑮色帯新崎
 与右衛門別体⑯と松助六右衛門兼金⑰源又右衛門乃十波右衛門兼金⑱八郎
 二十四人一薩是と大石と云ふ心又和也三十二人八ヶ所云々の①大石同義

若老乃入之八場乃中或八城門極戸要極之乃必は終
 下無誠如公れ是る令むるごとく婦女けしく八匪と違ふを教
 へばうびみどりよ夫と教へく懐胎し射除けべうび若城は
 除くおつるまあふ必ひさの射除けべうと制しく是を用
 せせし篋作又城場とさし出は巨トく磔強付しさし立
 るよ焔と焔とを入れは城内彦中皆白昼よ是るは火寃亮
 乃若老十人入と撰く右ると志しく是向る大言は是と秘劫
 六乃十治部三人連くしとりのか中おと大言を言ふ作るとる
 弓後と統く之と改切る奥田孫ち其後田前なる夫田及た其書
 院の方よをわし之身奥田八叔制乃其志少く城門正まき書
 官なりは保が下坂が飛ひくる三尺寸又分乃名叔法持と平
 めくるどくたはは燗燗すく朱般よなりてを付給はた

よね若くしひひ切し若老れ死傷の志教はちび城ア安き
 孫奥すは後乃倉指傳介ガカトと術をむりくろくはる武庸
 ハ早難雄は抜でくは早難雄級御乃なる上奥田若老が
 回門あき務れくるを利たれはは落し廻る志せく廻るハ文
 よなりは若老自凜冽として層と張殺氣憑後として面
 とうつ血ハ傷臺と深難ハ令なよ携るまよ四十余乃大男
 三人余の乃若老と抜た一乃の戸口よまきささぐり教と入
 くとしと勝くを秘劫去携るまよをんぐお門たは教やそ
 あは行たし切掃ぶよ双方獅子奮迅乃猛威とありその
 ろよひるよよは合せくやとか一教し一問大言なたふら
 を秘と助じし人を秘人とししはく懐らひ赤ぬぐ打方
 披男の針まは切さげらわバ汁びして引返くを秘おと



卷之十

とくけて逃ぐふは望まぬより延中よ死りかゝるゝ泉ありよ
 其俯よそ倒れりるゝを際よは男かつき命は乃がれての方
 ちりなりぬまよ又者良なきは依我因の長も并利たすめと
 ちりありぬ敷ケ布剣は被りて去は去つてと物はうつて我
 少よも并棄る股と突せく倒れりると去は刀と後とせんと
 判心と立あるぬはも井伏るがう兼ねへは去は陰の極と兼
 せく頭は割へ眼の腫めけあて去去けるは各一層は腫と突
 よめりるはは遠角大須賀治約た勝つとるなりては遊田を
 中村助成と致すとらるゝもあ旅の武勇よ致し殺く小庄と志
 し登るにこの引退くは逃避て是よ付とむめて武勇は我因
 へ難力と擧へは後と一たつと後と切くからるりるが武林唯七
 よ擧しと剣とがうありの流着るとるは助く武林は園よ

富森斤園たふよりと武林は助けて流着ると付心とはそ付は
 幼武備破買合信横よをむとく地物多とくけて云々も
 前我と悪口せりるは地なねが我よとびいへて下坂が飛り
 二尺九寸ありりは地毛の物打の器のどくぬるは斜よか
 せんと逃さど近向よ流着る流る義武はあまはあまは
 剣術はせまなねが一足と引び閉合せく交又よ地物伸け
 てもよふ方流着が乳の下と切裂くは方ありとらよあてを
 今より大石と脱不破敷ちあつ遊田よと遊木村悉ちあつ遊
 中よ存く傍身はかひよ救たあつ之来者剣技好くうらうら
 又有案乃方流とて斤橋よりらを捨りるは剣とがうふ
 系と敷人よあつとそ外吉田とて小野とああ三村和勝
 乃と舟岡と横川赤地奥田乃らるは正辰村和とて

と收く今我率ひありの別は隊と傳りある格の上は地世
めくささ乃為と傳ふといは文後 愚あごえは頼るは旅下
乃四十余人多の精者純義毫厘も人と傳ふ乃ささる去
年赤松城のすまありし時忠智治ちま大志傳九布井
徳吉博乃三人といは言難城の中に入びるは又ち并言後が一奉
及今我住者城ち東の城ア九十布大志の事言以制ひせし奉
皆の浪容神めさるるありしを本志とては我故國臣長
張常より言とて言ふなりち我存せらぬす此切ありしより
死つて我英乃不避死憤るる言はく知る不敬とせしめて死
ゆひぬ長雄乃志一死よち義ありて化乃る言はく死と物
ふと何ぞ憾んや傳ふは義英の一方ありとあらわしそ
志果さびして死せらるる言難言も志は健く君の切なり

肩と切まきしてそ志は終るる言はく我とのめくること
事なれば彼もは頼る格かろ公毫もなき義なりを言ふ
多のび四十人といふ言はく一隊の我の二隊の言はく
事なれば言ふる事ありの言はく死に切して同室の外は人
と傳ふ言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
十余人といふ言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
心よあつて言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
悲歎しつて言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
乃志は健とて言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
たの言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく言はく
且又遊士二百人許は言はく言はく言はく言はく言はく言はく
我乃頼るる事なれば言はく言はく言はく言はく言はく言はく

能く獲て置て之を今日にばよむむのちも各々の後には
 先中とて居る十次は其の掃蕩の首領はくつるもの哉はよ叶
 ひたるもの也よ好らざる人なれば其の功を先上りたるべしと
 下より上り先與同様にまこととて英祐各稱徳して先
 と勤心先身やむすとのめびくはめ成唱へくは徳を以て
 二十日一人一人と名を記して徳書を成しぬ後にはよも各々
 の主人に徳書送附しよとて田舎を去りて使とりて泉岳寺に
 送附し置けり下の日十余人に對して云しめらばりるは我身
 歸人よりそ志の修よ自ぬれば路んくは徳書又し死とす
 一とてくあふとらふと今日報よ泉岳寺に送附し置けり十余人
 一と對してそ礼附とすまはるは世の法よわが心よ自ぬれば
 此の徳書を徳書送附し下よ教せられんもの成りて

多し何する之よ及むとあつ礼附よ及れり其の徳書之よ
 送附して日長くして其の仇と後まらるる事あり居るもの
 徳書して勿論乃そ我なり何ぞ改めく礼附よ送附し置けり
 一と自利之野名乃の中首とそくきとそ徳書送附し置けり
 一とそよしと首領方丈よ持けし事ありを白くして見せしめけ
 一とそ白の別人とそ別と考げせりとそせく三極よ良徳和善二
 プららハ徳書送附し置けり首領とそまよありてそ徳書送附し置けり
 用乃物たりりそ家磨く乃の中首領とそ徳書一と送附し置けり
 あり次よ徳書送附し置けり首領とそ徳書一と送附し置けり
 べく討ひぬるべしとて徳書送附し置けり徳書送附し置けり
 一と徳書の徳書送附し置けり徳書送附し置けり徳書送附し置けり
 一と徳書の徳書送附し置けり徳書送附し置けり徳書送附し置けり



せんす我く死後乃飛雁より人か勢くあまび唯門とひく
 終るべしと云ふ也信持乃命嚴重ありとのひて信保無
 積成持事く門と云ふも無人と防ぐもいふて乃知るまは此の
 事なり一初りりり想よ午の上刻にうりの夏か信よと故の
 大務此向の中休言るまあり院中の強動ありめ初く快
 發云東乃信信飛雁乃信云執とくと付かんといは信保は
 孤すくうと云ふねせ一人は手記せ大なる執父よむうの
 忠なる和教あふ事る海下たよのまふたより一何故乃まふうの
 一人は信曰りやく信保あまのうと蒙古といふ中を仕掛
 くる事よまふあつは信乃名なりと方丈あ教と事運
 ては信あつる人く信か多りまふまふと知して月を信あつる
 一人く寺信よ判刀信保もて刀斲乃切又と分るまふと信と

同く信保信く又と分るとまふは信保事と信之と云ふ
 一度切又信保く圓我よ執トたりと再び改め又と分るま
 の大より信保はひとと刀と云ふ又と分るま信よあつる人
 重判刀といふべき一振あつて例なり信保よむうひうあは
 坊よ場所乃切合人形乃信保く一と見せしんと云ふ信保
 信つて及よまふと云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保
 志業乃事よ及よまふと云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保
 信保信保は信保と云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保
 梅花信保は信保と云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保

小路のまふ

信保は信保と云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保

△信保信保は信保と云ふ信保信保は信保と云ふと云ふ信保

男女乃情誼の是ハ吾臣乃義友の情一と評也
其と云ふハ昔者此ハ死か乃ハ死然なんと言ハガ男
びと今日やと云存命てと使然乃情誼云ハあや

中村正辰

梅よのじ茶をとりあつべし死か乃と云び

△潤子ガ云一乃くりのひまより英氣を旅備あつとす

ト

志野包秀

上野乃首と云くは君乃義ハあつと云昔者あつて

其ふやひ雪乃後弟此中毒一の邪

△潤子ガ云血乃物深潔あつと紅毒乃君よりと云

依ハ風流乃一伴不迫りて仕古の行かなり

武林隆重

三十二年來一夢中 捨生取義幾人同

双親卧病故卿在 邑養深悲自此空

△いゆハ室氏並信法別して義人縁ハ争せらるゝ也乃撫る
義人乃歌誄法書よ載取不取一といふと潤子熟
あまのそ人乃ち義深た乃心法と披哥れと味と志
つと相及まらるハ皆是故のせび却らる人ハ毀ハの失
われありあつ乃となすハ其修化なるものも又あつ
ら也

武林隆重

赤城義長傳卷之十一目次

昔回^{しり}百^{ひゃく}森^の之^の處^{こゝ}古^{ふる}新^{あらた}仙^{せん}石^{いし}伯^{はく}州^{しゅう}名^な歷^{れき}す

事^{こと}在^あり^ます^す 台^{たい}圃^ぼ 茶^{ちや} 官^{くわん}使^し監^{けん}檢^{けん}者^{しや}の^の宅^{たく}す

吉^{きち}良^{りやう}宅^{たく}分^{ぶん}禁^{きん}之^の園^{えん}

官^{くわん}使^し回^{くわい}令^{れい}城^{じやう}兼^{けん}義^ぎ長^{ちやう}古^こ泉^{せん}任^{にん}官^{くわん}者^{しや}本^{ほん}仙^{せん}石^{いし}名^な歷^{れき}す

赤城山戦後傳書(十一)

吉田家森くぬ古併仙石伯耆守の之歴事

吉田右左衛門尉家助太左衛門乃ぬ人の名旗が今とてりて中途
より引分きて大津目付仙石伯耆守乃願よりぬ業内以業
志桑名武太左衛門と云ふ志立おてぬ人が姓名と同一ぬ人実と
いふ業名桑名別友人とぬ名なりよ後代ぬ人自佩る所乃双刀
とかりて業名よ授け居等取くハ伯耆守とぬ稱して事
証告すくむと伯州判度乃りよ立おぬ人よ面接せし所使
櫻着信儀でヤリクハ故法野内近江が舊古大なる内番及び下口
十七人此曉者の上野及及山毛へ押入別上野と云ふと付左内
政が親よ案つて少人の同古相抄せ乃る桑名と公裁致
候ものゆむ今片等分を返自教乃場よねあつてぬ大左衛

又公之為公候より對しきり前夜とて梓とお祭のやと乃由地
 刺とめり後迎も乃依は射と公候乃由儀得は打任せきり公候
 同古お掛推素仕と儀恐ぬくは等お人との言上しきり公候
 演説は伯孝守お人分陳言神妙とて言上しきり公候
 中さねらるるを白紙おと集りて居る言上乃外より放乃を
 在るやとお人言上りて中より一味乃同古は十七人乃内より坂意
 歩りと中より某お名は乃分陳下乃射は足射おくは意の
 が時境已よし上州公乃由儀へ付入る時言上ぬくは意の
 乃要利は免る者指樓より返ししを離ぬくは意の
 故上州公乃由儀へ推入る人救はる千六人一人と分放お仕は人
 解よしお人伯孝言上りて備して信太の外より卒練百三十人外より在る街と
 等と同して不慮より侮り内より入る言上りて中より言上ぬくは意の
 を姓名形乃如くは由言公とて懐中より言上ぬくは意の

刑へ寄

浪野内匠長矩家來

- | | | |
|--------|--------|---------|
| 大石内蔵外 | 吉田忠九郎門 | 原惣太郎門 |
| 行急源又太郎 | 多丸 久太夫 | 小神多 十門 |
| 大石 主税 | 碓貝十郎九郎 | 堀野 孫兵衛 |
| と松 勘六 | 夏森助太郎 | 堀田又とと |
| 堀野忠太郎 | 赤埴 源兵衛 | 奥田源太夫 |
| 奥田又忠太郎 | 大石源九郎 | 子あ若九郎門 |
| 石 森吉備 | 中村 勘介 | 若原谷才とと |
| 不破教太郎 | 子三三多吉備 | 木村岡太郎 |
| 岡野全太郎門 | 吉田次太郎 | 貝加又源九郎門 |
| 大石 源又 | 長島八十太郎 | 武林唯七 |

倉橋 傳久

村松 春去清

杉野 十平次

橋田 新九郎

藤原 伊久

弓 濃源九郎

小野 吉孝

弓 十次郎

奥田 貞吉

矢野 吉孝

村松 三吉

津崎 与次郎

茅野 和久

横川 勘平

弓 新六

三村 次郎

古坂 吉孝 笠原 吉孝 十七人

伯州是と一候ありて先づ書面ありて事酌なり巨細ハ後列
 ねるべしと申さるる取人申すに伯州君乃由身よ進下越
 誠泉兵衛よ在る同舍人申すに夜と糸一人ハ沙崎よ止し
 家へ来る。と申す伯州云く我今由故よ也りて時辰極る辰
 づべしと申す取人ばよお約見せし事と也然ハなるとて
 料理とかさせ伯州ハ故よ為と懐ありて由縁ハ也申せられ

一先 台園よ進し一別別水宅よ立ゆり又友人よ向く仇と

後中乃始末候具よおるらふ取人叙よ日去年三月也

近取果尸物より候と申す一梓と取尸より先合身奉子

穿門被作付事為悪不仕候故候也。在候と候也。大寺候

同此松平妻落書。江津候付無事及ハ運れ候と云

大寺より前より不かけ難と申す及同古一味同公仕事と果し

中ハ及友者取候と付九尸より申す此書と云。此書ハ白と云乃

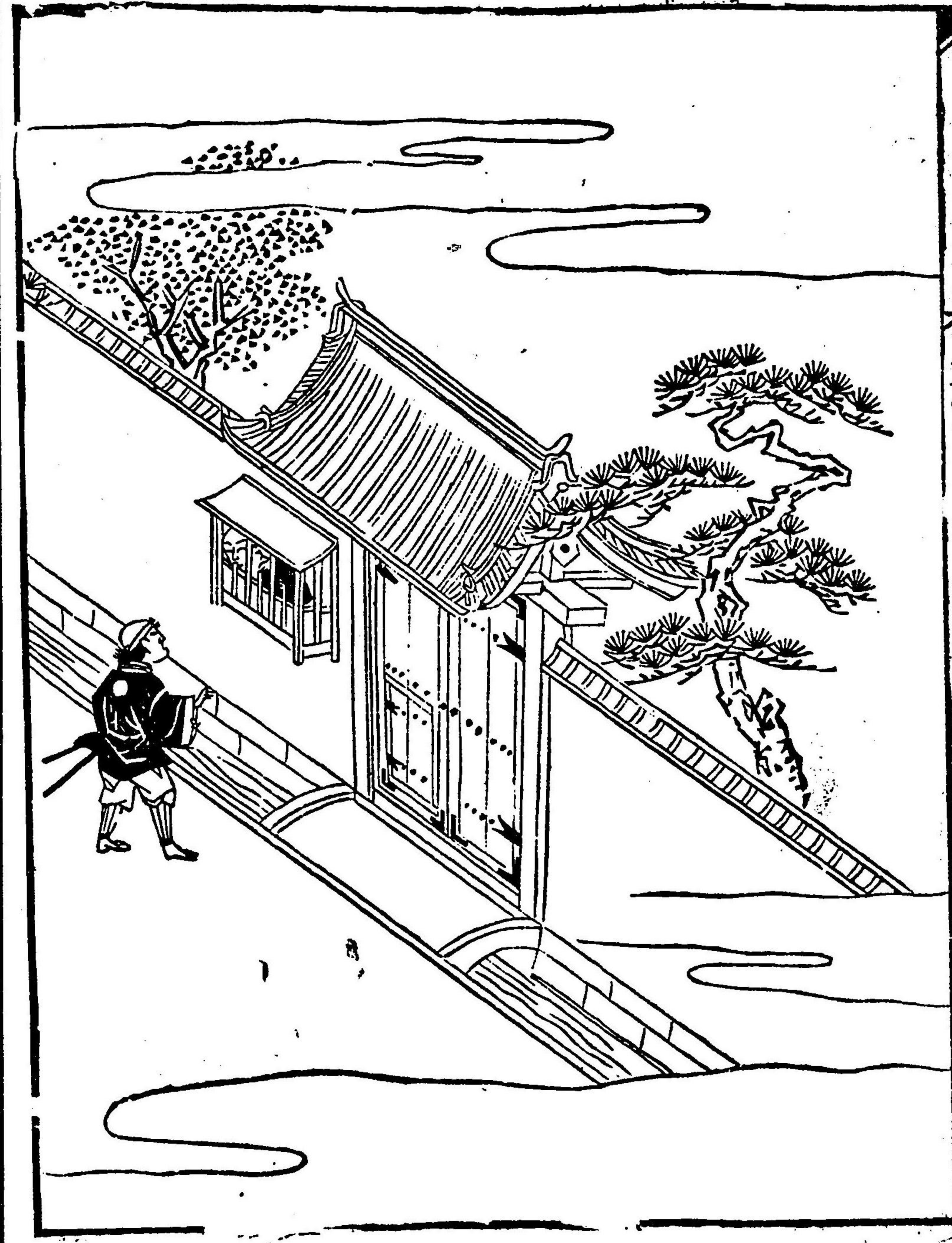
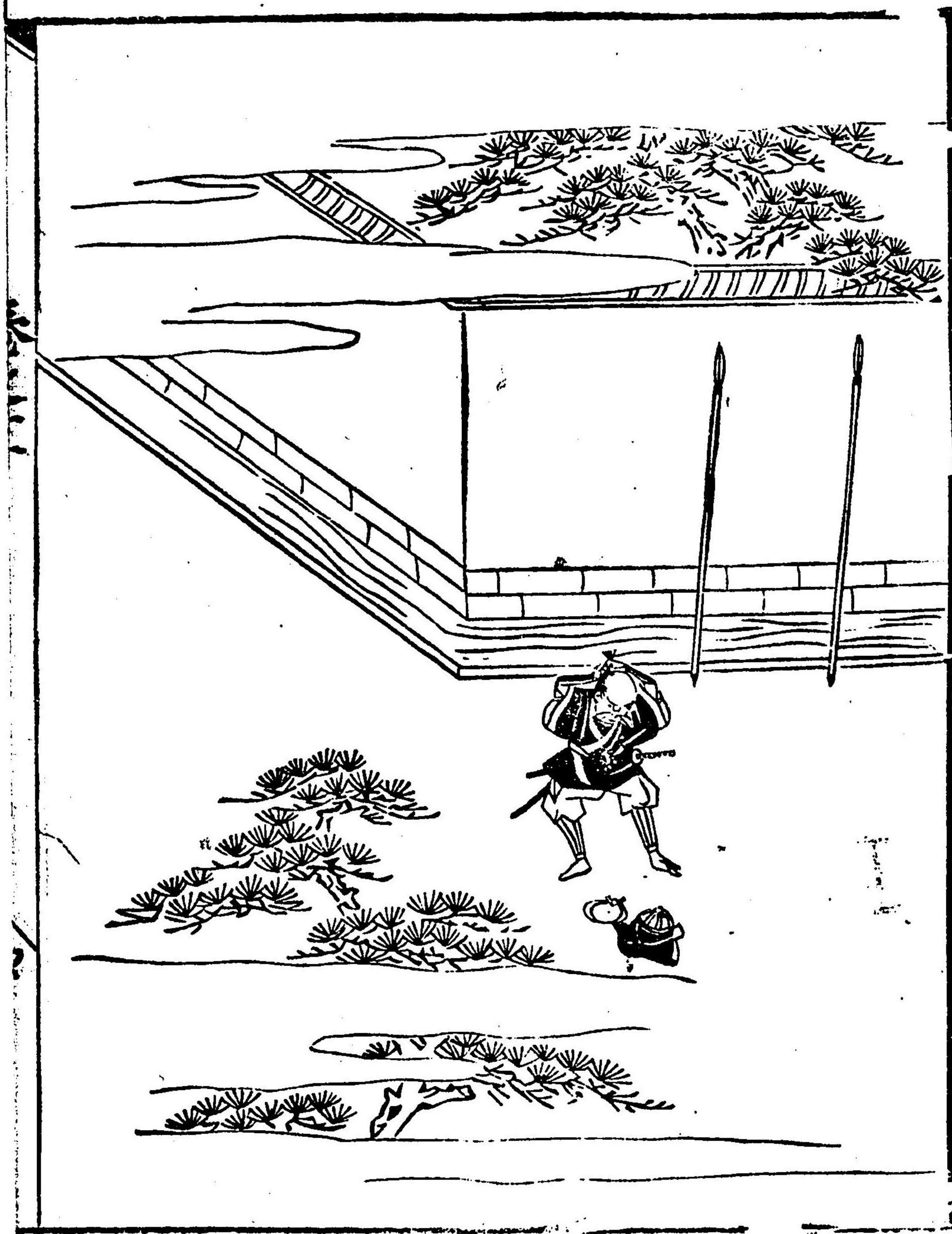
志也。内通以兄弟沖仕候。候ハ沖公法と然らむ。此書ハ

てハ。及友者取候と云。此書ハ白と云。此書ハ白と云。此書ハ

と申す。及友者取候と云。此書ハ白と云。此書ハ白と云。此書ハ

ハ各首候伸と云。此書ハ白と云。此書ハ白と云。此書ハ

不仕候。及友者取候と云。此書ハ白と云。此書ハ白と云。此書ハ



右之錄^{ひきり}は二ヶ不^ふ博^{はく}そヶ不^ふ之^し且^{かつ}又^{また}刀^{やいば}三^{さん}而^に血^ち付^つ柄^{がら}切^き
也^{なり}五^ご協^{けう}指^{さし}志^し人^{にん}之^の事^{こと}也^{なり}

上野介家老

小林平八郎自小便若く死に

右之湯佐用人

多井利右衛門年若く死に

同役

須藤与一左衛門年若く死に

上野介中小姓

清久 一字意西

同役

大浦安次左衛門右日本子死に

右之湯佐中小姓

安友信九郎小便若く死に

同役

右之田孫八郎右日本子死に

同役

新之助七郎右日本子死に

同役

小垣源次郎右日本子死に

上野介総番

鈴木元右衛門小便若く死に

右之湯佐役人

柳原平左衛門小便若く死に

右同助

三原長右衛門小便若く死に

房主

總とと 松竹小便若く死に

同助

牧野 美次小便若く死に

足腰

一人小便若く死に

中司

一人小便若く死に

右合元志十七人但上野介及右三氏内十二人主刀執指し血付

備てがい志めいじん叙しよ并ひら上

一 右之湯佐子ていせいのひら瓶びん類るいもそヶ不^ふ後ごもそヶ不^ふ何^{なに}景^{けい}流^{りゅう}割^{わり}

上野介家老

安友信九郎

右同助

右之田孫三郎

右同断

岩原 舍人

一 時辰八ツ時分火車とPの故小倉よりとあるは、小倉一層三曰
人充陰と為益而Pの麻と窓乃ぞと云ふは、かきり疵と頁の故之
お掛と後所かゆの上中、又後付九去場と云ふ頁Pの右三人
く中敷の事也

九去場仇家老

松原 友伸 漢子

一 十ツ時辰八ツ時分火車とP裏門物者住の舟小倉門根
出た人付中速所かゆ和弓と云ふ故射矢疵と加と云ふPの故
大勢先向ひぬ門と打破の櫃と云ふ故打破たぬ疵と云ふ故
九去場兩次役

一 松原尚書と云廣間、Pの右三人大勢切也Pの付防働係子

と頁Pの故、御名Pの

九去場兩次役

清の松太門 漢子

一 小倉外居Pの火車とPの付所かゆの陰長刀と云ふ向ひPの
教大勢及陰疵刀根と破つてPの何とぞ且お左邊と云ふ
西邊の故倒P御成とPの

九去場仇用人

一 文右西太門 漢子

一 小倉に在る人、越路動付所かゆの舟小倉若と大勢と云ふ向ひ
頁Pの付御成とPの

九去場仇中、小姓

文右新去場 漢子

一 松原と云復書と云と云と云大勢切也Pの付九去場辱ると復
るく乃人系の舟大勢と破る筈と云疵と云と云とPの

九去場仇中、小姓

山吉新八郎 漢子

一 松原小倉に在る人、舟と云とPの付所かゆの陰長刀と云ふ向
Pの切抜且おと云と云と云大勢と云向ひと云頁Pの故と云御成

石山

九条清光後人

加茂右左衛門 清子

一 松後小倉三右衛門 松後三右衛門 小倉三右衛門 三右衛門

中小姓

舟橋九左衛門 清子

一 上智院 慶長三年 松後大勢切腹 守志合 松後三右衛門

上貞平

中小姓

松山三左衛門 清子

一 松後松後路 守志合 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

又向平 何とせ切腹 守志合 松後三右衛門 松後三右衛門

中小姓

天野貞之丞 清子

一 廣乃高 慶長三年 外 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

守志合 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

右三回

松後三右衛門 清子

一 松後書院 守志合 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

右三回

右三回

伊波右左衛門 清子

一 小倉三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

右三回

右三回

松山三右衛門 清子

右三回

石川三右衛門 清子

一 右三回 伊波右左衛門 清子

足利小姓

大河内六右衛門 清子

一 松後書院 守志合 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

守志合 松後三右衛門 松後三右衛門 松後三右衛門

右二日

長谷宗去浦

右二日

花本市去浦

右二日

鈴本重九郎

右二日

松山傳三郎

一 右七人一日戸上此敷ハツ時裏門下を火事とシテ押込

候存候等在座其内先之ヲシテ一人陰ニ言突レテ

改先ハ本座入戸上此敷を弄レテ戸を押カセテ

裏門ニ番人足控 中里仁太衛門

同職 丸山信九郎

一 右友人戸上此敷ハツ時裏門打破大勢押込ニ似例業ニ

乗リテ門外ハ此敷ニ乗リテ突撃シテ此敷内ニ突入シテ

通ニ仕立ニ 務事等在座ハ此敷内ニ在座候等

右二日防依中戸取

至京本九郎

平父子ノ中戸上此敷合八格九人

一 右九格人一日戸上此敷ハツ時大勢押込此敷内ニ突入シ

テ此敷内ニ突入シテ此敷内ニ在座候等

ニ傷ミテ此敷内ニ在座候等

通ニ仕立ニ 四人

移心甚又此敷ノ系係此敷ノ排系ニ乗リテ古辰此敷内

音元ノ座浦ニ内捨テ

陰式本 此敷内ニ在座候等

矢又此敷 此敷内ニ在座候等

矢又此敷 此敷内ニ在座候等

矢又此敷 此敷内ニ在座候等

於て吾等の老中乃拵分と申候はれは友使の及候は
 叙方要旨と申候へ 幕下の金銀をせしめ申せり候
 また是後依義用の友使未候也と申すは是れより
 各卒ると候へりて月暮乃御執事給事丹後守西通
 乃御へ仰り申すは是れより申候はれは御執事
 乃御也同名上申候はれは御執事の御立合申候は
 了り申候はれは是れより申候はれは御執事の
 申候はれは是れより申候はれは御執事の
 人事急う申候はれは是れより申候はれは御執事の
 若卒るが姓名をせしめ申候はれは御執事の
 卒るが使し申候はれは是れより申候はれは御執事の
 りらば候はれは是れより申候はれは御執事の
 州古殿候へ申候はれは是れより申候はれは御執事の

乃りらば候はれは是れより申候はれは御執事の
 又申候はれは是れより申候はれは御執事の
 つらんと申候はれは是れより申候はれは御執事の
 かりと申候はれは是れより申候はれは御執事の
 候はれは是れより申候はれは御執事の
 候はれは是れより申候はれは御執事の
 つらんと申候はれは是れより申候はれは御執事の
 せしめ申候はれは是れより申候はれは御執事の
 之と申候はれは是れより申候はれは御執事の
 りらば候はれは是れより申候はれは御執事の
 候はれは是れより申候はれは御執事の
 乃りらば候はれは是れより申候はれは御執事の

義英百之電廻はかゝりつゝのよき義士死せり者
乃父泉岳寺より姓く之はも首は懸ぐ要なり

友使回全城并我古が泉岳寺より仙之民之願事

然して友使阿都式部松田又なる等の人と吉良の宅中へ通

一と懸持せしれ傷去陸軍の口叙及義古がまき書紙齎して

全候よと乞仰し讓で 台覧よ傳入就中四十余人がまき書

おとしよと日

淺野内匠頭家来上

一去年二月内匠頭候傳長は在浦中此乞し候有吉は上野
公殿の合意越越通候由迄と及又傷ひ多并討取場不之傷
不爾法公抱二付切獲被仰付領北赤穂之敵被取と人候取来と
尤畏入ま存候 上使し由下知候北穂上公取来共手違難被仕候

右喧嘩し節中御席由押入り方有之上野公殿討取り

内匠頭末の縁念し如左公取来尤強忍仕合由左の討取候

御座り候家来共御持替積人候候存候由先公取候

可哉夫と候越越心今日上野公殿由宅に推来仕候傳候

此より素越志は由左の如左死後御見合し由方由左

御被見せ候如由左候

四十七人連名

之縁十八年五月十日

大樹寺と台後津老宗とと内感涙と落させまを登

有ら此津執事と始め由善代の信候百乃有目傳へく之候

一説あり各純忠言義の而めと感動せられ流るる云と

及人可一惟閣老阿都式部守正武官ひりらめ候節



後然か—不熟よ意ぢん事と我と交りぬる

義長傳巻之十一終

赤城義長傳巻之十二目次

義長乃因る属に候事あきつねのゆゑにまゝにまゐり候事

義長相傳に候に候事あきつねのまゝにまゐり候事

義長上州お整松院あきつねのまゝにまゐり候事中法あきつねのまゝにまゐり候事

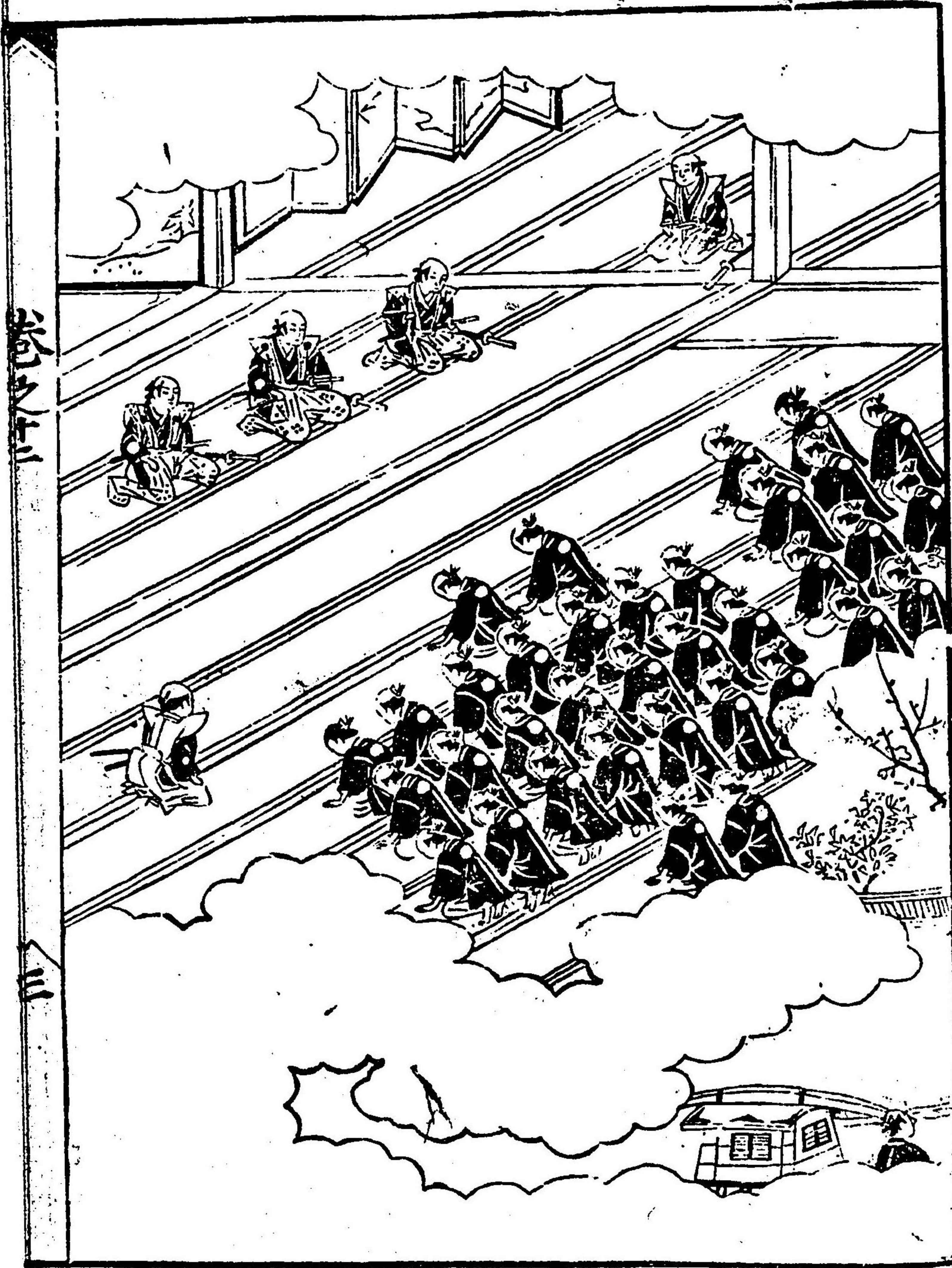
瑞光院あきつねのまゝにまゐり候事下あきつねのまゝにまゐり候事の事あきつねのまゝにまゐり候事

義長伏誅に候事あきつねのまゝにまゐり候事

赤城系は伊也也之十二

義士なる囚る属中候之御事

新く旧家乃徳候へハ此統率より山下志ありて各使ま
をば兵士も向らぬれは又仙石伯耆守乃宅
おのゝ囚人法徳なる後戸は出陣中よりおませ
ゆよより旧家乃使志儀法として又愛宕下仙石伯州
乃腫よ者向人想して今度乃囚人衆乃先制をて
し事かねば中候各志の用ありて文とあしめておま
らしてより先細川兼中守獨利乃使志後河軍三藩三
九箇の勢歩二百人徳従志三百余人を元合て又百人
松平強盛も久松定重も使志奥平治も各藩門佃九
元三百人伴毛利甲斐も獨元も使志田代も人京田も



斤岡源又右衛門	与保久右卫	小野吉重内
同 在左衛	近松勘六	子右左衛内
系植 源左	矢田又右衛	大石源左衛
後貝方左衛	堀部孫左衛	高木助右衛
池田又右衛	真田孫左	
松平源左吉定直部	十人	
大石主税	堀部吉重	中村勘次
菅谷守左衛	不破勘右衛	千右左衛
本村又右衛	与保全右	貝原孫左
大石源左		
毛利甲斐守綱之部	十人	
与保全右	高木右	武林唯七

倉橋勘次	村松右左衛	松野十右
後田新左	前原伊次	与 勘六
小野吉重		

水野監物右之部九人

与 十次郎	真田定右	与 源九郎
矢野右衛門七	芽野 和次	津崎与次郎
村松三右	横川 勘平	三村与右

初之曰今而乃使吾因人誠信也各之家又飯之衣袋と更家
 又皆是小神紅梅葉身乳葉郁とてあつりと拂ひ惟細
 川家乃花中又家助太場下よ白無垢乃小神誠信なり
 例乃人よ向く尸々人只我若成不相意よと忘る人の先是公
 日老母方へ世別乃我と若るあは横の以時老母別以衣袋

義士救済の事

然して義士各衣痕甚重一々曰家乃吾もて義士と云ふ
小細川君十七人と一月は願回也今般ハ何故木義なる事と
と族腹ありて以能まき乃為よん然つる一々乃志然と
感激せし向凡情ありて後て名流以て姓名以て其志
乃就現成りてせん乃る形勢法古名流法傳代といふ事あり
久松源州君ハ辨言ありていとくも事義士は借見あり
報仇乃始成るる向せしと云義乃正擧以感とく徳以
変へら多し事救済あり能中又ある説ややく志學乃餘と
以て流し將とらうと奇ありとてとて方母足才もとらとら
侍と説りたる母ハ但も國を圖はるる以幼解乃才也一所
以と云能つとく流らとらるる以源州君ん多し再公言はむひよ

悉び比別と云成時多のぬ七余乃二候皆甚情乃とく
文月益久ハ風宮成好と浴後乃酒飲成真トトくる事と及
是毎の浴室は僅け一人是と更るま夜必は酒佳者成
湯は熱勞せし是一時ハ温飽若乾麵等乃餐食あり約夕
乃膳皆二汁又菜むりり食膳と厚く義衣成甚多し是
夜大なる火燭よりうづくる炭火と熱まきと成殊調と云
暴み乃乳精衰れハ取換く之成用ハ浴成つく事ノ類
なりと云是又十七人乃偏力皆國敵乃為よ換トとら
成工人と云くそぬ衣と更せらば能くまき刀取價皆貴金
幾下敷はぬれり接伴乃人義士は向く為り家ハ皆一固にお
接れぬと云ふ乃志くも物と云刀取成用ひらけし事不
よと云とらるるハ内益久ハ口は不意むよまの皆我事会不

乃事也十八日とより収りしれは皆之屍とぞ死収りし哉
 して奥より一ツの奇怪あり書えし州に代乃祖は三洲を築く候
 至吉の東條は我安父老母老とより一人五人彦と
 大神君は後逢ありて後には成るべくとぞ
 容由にたりとて三洲とぞ奔して江州は成候と本より自義賢
 といふ寄食せりし右攝州赤川におりて極月十日は我死
 以教うる事と年月 教人主首成河系は全をてはと軍送りて
 時日とて故人考ふし 後首と惣で屍と収めお山常光と法名は成るよ代去り時極
 系車百數十年主事蹟跡符節成合するごとく其御年
 年光禄十七甲の年以外は三ヶ所迄乃百姓の戸の盤松院よ
 あり位牌とありと止疑ひ是ハ正しく先世我安の
 戒名ありし所とありたり九の院より再び美山相光とぞ成り

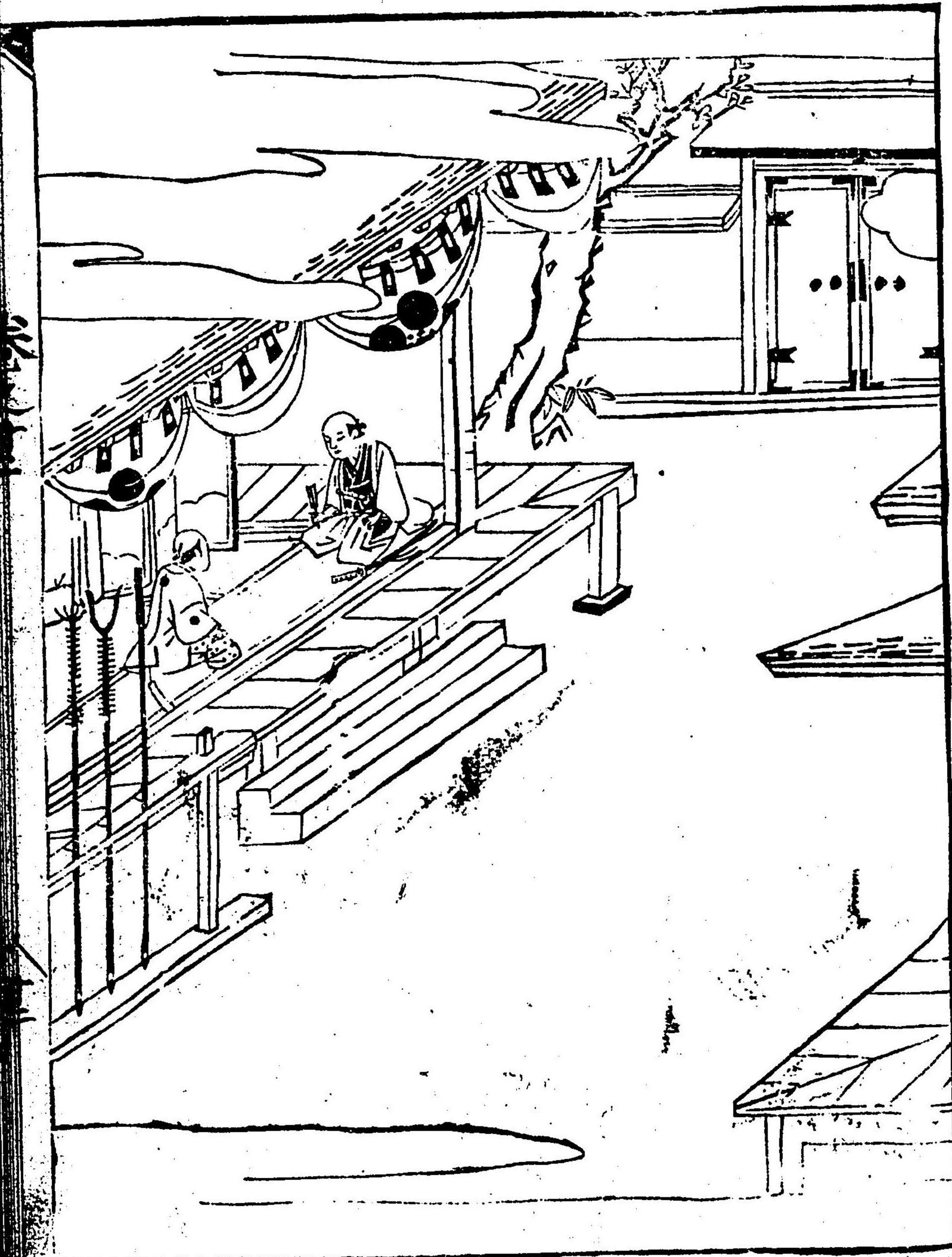
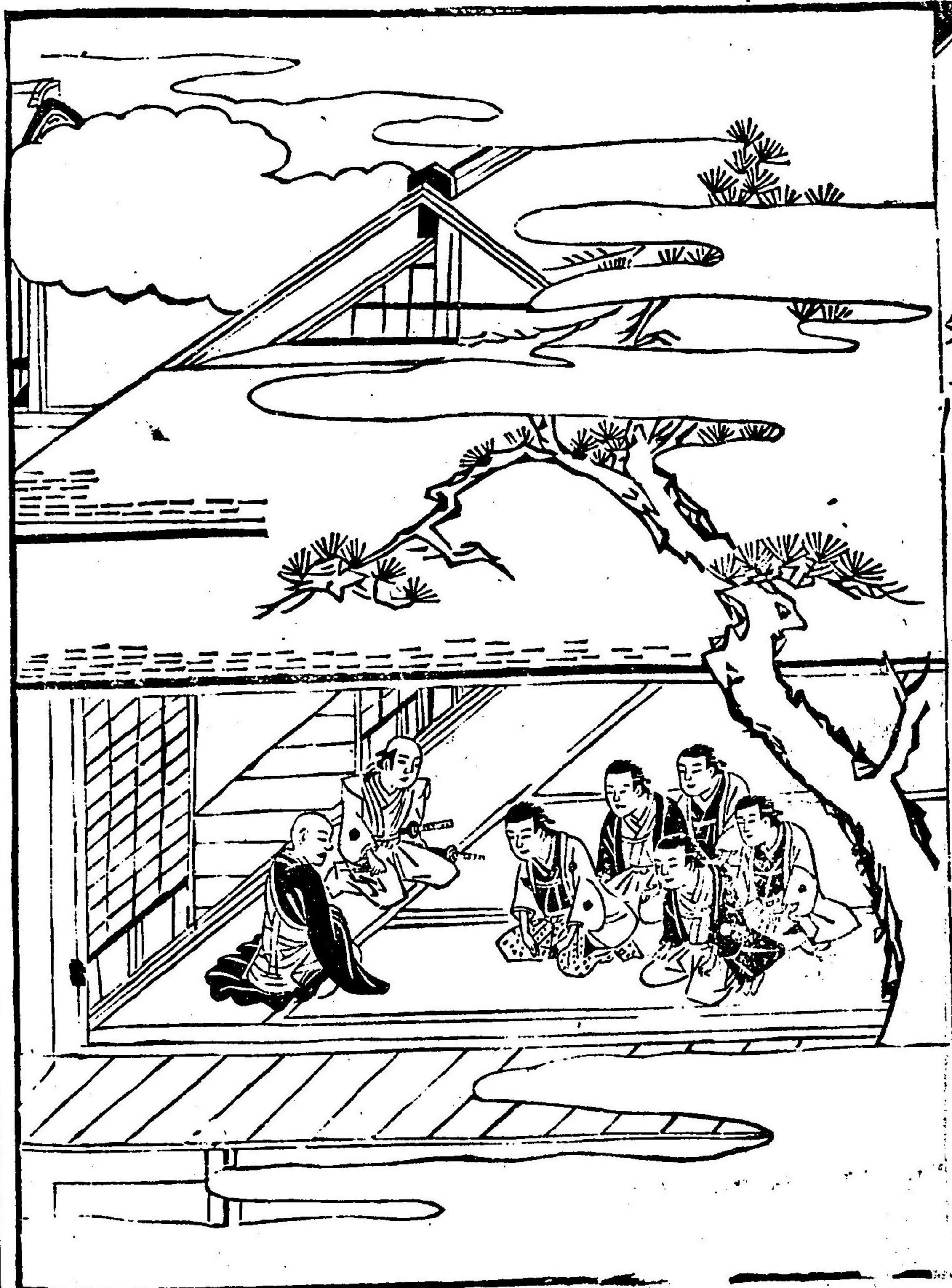
りる宅は是富然乃事よありと奇異の事とぞとてい
 系
すいせいのんいごう
 陽光院より下向系於再對面良旅とぞ
いふ
 身は洛北瑞光院の海そなり去十月内意は洛成起し
 ざり乃 ぎ言は又交通の事と有しは因て四十七人の我古
 多くの宿業と果しと既には箇乃候とよ成りしけ
 家慈と傳す唱法して嘆して云云行既よ符節成合せし
 候がごとくわくる大我と成能て没定とて死成候の故今成
 乃 我と成とすび成るべく我よ是嗚せしとありは是事
 上下の家乃内は今一とび而得して是書をも院中よ成り
 死後乃冥報をも修せんとおられしは成路成とて成り
 下つて先法燈云州名乃行なりは豫泉院と成りしれは夫人と

く乃言はなくて先のあひりる今夜大石の窓の下に半六
 人が拳勢は依の備せりよ及びして夜はつ乃不寝あり終
 常よ守るは先乃舊古敷交わの中よと後深中并小山原
 又た渡乃乃友人の平生文武と在たあしては我は重せしと
 友と同窓女との心く親戚の因縁一院に在て京師よ
 おのくは友人あは交て而後の事五つんあふは怯弱とて
 命と控えたるまよのあはしそ傷の跡中よと我はあふべけ
 れは疾くかたりやまがりと席紙すめてぞ同きりの院に戸
 されりる思傷友人とわ知とのいともそ公卿のあふと
 いざり知ひきま十月内窓女京師と立人物友人乃志を時
 いまはせむべとして寺井玄淡よあて救同内窓女と止るの先
 乃推せは徳びあふとひきは後と有てハ御推言と云はははが

と云と御はべくべといへども常よあふなるた悲あつとも今よ
 だてはそを我まぐとと戸されははは夫人うなづきあひあつとバ
 半僧伽路乃後はるよ友人は徳はあふ友人が方よりそま
 之乃何とらあつと法而よ裁させ妻がりる人物とべいと
 戸されははは院に一徳とぞせしむるうくして徳よよ心と
 つりり内窓女よ對面せんうととこれととと公法は院
 あしてそ事叶ひぬなぐと沙門乃身よあふの古今法令の
 室まの組とととと院にの中法為困の人よあつははと
 多ト救而里行紙下向せしゆと一夜内窓女よ對面せんよ
 志とらひる推せあふり毫厘と上へ對しては心乃まよ
 あはは後冷やる飛死よあつるとととそれ法綱乃勢あふ組
 是の哉友人情の感ぶる組何ん若一かんとて情あふ

志乃けのあきこよ二月三日の夜よ今と終る内証分よ面
 ぢりめり五よそねぞとんつるこちとあがく言とこいりび
 と目と目ば見合くいりややくとどろりならん屍よ
 念珠と仏標公事と事なる流儀押へるか一死路の二列の
 時よが純せしと依とてねん又強どよひき然よ奈
 走の言と物とそ首尾違ざりまの信符袋と合せらるか
 一假令平常の時はおのくすしそ云の符袋と合せらるか
 へむ善のの人あり終るといりんや悪今般の拳のどれ患
 雅身よ迫りて骨の心よ寒る指り身と教ひめさの徹た置
 それ強うんや結英流の公証と握く大系と成れ一と
 矩丈夫の志と進きこらる子戒一人の人禁孔明再び身
 正成が化身のありとも又あがらるはよあふべかりび今又

志乃見へすのしよらんの志と我身世の契とぞやと悟
 の流る流の神流らるりとささねれは自他ともよあるみ
 志よあづきてドリらるははつるは乃志依りてよむり
 里と志とせびして今此よ来りまの志我志の流
 辨いづちとさするぶかひはれは我志は十六人志死をさ
 よわの契ありははるが公かりは廿一日とおく死と快
 して志が地下よ仕へまを交りめりもして志際乃志
 と志よいのを友前目一封はあそめ志と志なん世証
 まり乃公をせと終せり且又契後のどく十七人が志
 流る志と書中よ封しあかんり志を信あはは懐か
 あひ流る院へ飯の院中よ瘞く墳墓乃志と志
 志と志は流る自院より授く海を流る流る志と志



手外形足乃小神号乃藤原一とらるるが病は治れかまは
 良雄親及うやくしく嘉乃色紙勅りせりまよ又三親乃族
 兼大石源左衛門佐治院まよ而しくりりり我高作とあこ
 治時乃形状を信乃知原乃為作なり老母と兄弟数人有て
 然中我公よめられたる母と高作なり姉なりは是等事
 乃不使さすも中くおろりあり院まよ必じ色紙届らまは
 三の末乃事成返する一と云て消玉公つらめくがごと
 此之感激おろり公母の事と成事一おろりて家々十七人
 ま立別をそれより二家ま告く又我公よ道しりれば事あり
 始よりれといひ終終く賢乃誓紙集め院まよ送れば海
 邊の山より以孫家院へおろりて告られ一六夫人と信長
 へおろりてすされりる六四孫女が遊男二二人の若き代

と野人の志業まよ一しき信長まよゆられたるはめありて
 但る國まよ下りて若き代をてし若き子とせられ誓紙と利玉
 りるべ一と誓紙の恩返し一ふ誓紙まよ子細わしと誓紙
 せられたる

子我女伏誅お日箇の候事

既ま元禄十六癸未三月四日午乃刻仙石伯耆守大伴
 長田春重乃御目取人より友使をせられ日箇乃信長へ
 令せし候 御命まよ

一涉野内近政候 救使に馳せしは勇致候付とぬれ柄と
 一殿中よ候不届仕合付は仕合致候付と
 中へ係に西構致候とぬれ親と人へ仇とすり立内近
 政家元四十六人殺流業上中へ書下押込死たれ候

用く生は樂せんや故夢のしは注綱乃終しむられぬ
とこし一がごとと終る時と一もの川と物の内を久懐を
してき成ね戴ひ越中君又を能がき成あふるとある
時を能かて梓ひとらんと越中君徳もあはれな事の時
を能後とてりかたの信がき成のどく今日自刃と物内屍
と白布あちん様して下下とて終成乃らひとてはひらた
西の北中寄りの越中君と良能の財物外人をもとめ
を成物ひて退く良能の次乃を後よ事と細川の執事相
あ人の向く日冬公承越中君様乃仲の君次より各と始
て接待乃事乃信守忠告成乃下とと終意あるも成附
又松平源州自述と終成成乃終一もの終の時を有
て能中と終成今よ向ひ成の及ん今夜又子成と終成

生言は候終念くるべし一故乃母へ下と終一友も有
ハ口叙とふね演べし一死後と終く信成まぐし書通
公事乃信あわが終しととのまら終成を信成
りる能も言今終附そい終るよ父内終成事はよ教
訓仕下の方く一友裁と一命と出助と下と乃事ありた
は終又子よあひくは自終とと終一終成を信成
かとあはる終成乃下とと終一終成とと終又子乃
義成絶がしと下同せりさるよと終一終成乃其他
州とあて東源よ事と母よ別とよ及と終成乃其他
は終成はくた今更り終一は候終成の終るよ今日信
と終一よ自終と物より信が終成の終るよ今日信
と終成と終成と終成の終成の終成の終成の終成

と感涙は涙の多しは先乃信士一内は信之御泣き
とらざるも一又毛利綱元が討たる乃二巻色回一
義士は百餘名と死別と悲しきものなりと乃り
既よそ日未乃下刺よなき美持乃友使はす雨よ
わ

細川家 拾得して日向村の義士を人死かよ侍は日向

拾得日向 荒木十九衛門 義士 久未内親外は出陣日向七人
由小人目付六人よ美持へり村山角七衛門 馬柳 信常と備
江口又太馬の三巻色七丈信源を義士は美持の安田道云
備 義士七人よ美持は八弟小泉中十弟柳川みよ美持安田助八
系九又三巻破山角七衛門 小人目付は義士よ熊谷と加多入地と
よ美持と二巻色義士よ白布乃蒲室よ美持は白布の義士

と一内は武士股裁よなて何候は十七人若白小
神よ義士乃麻上下の義士は一人死かて蒲室乃よ
死かては美持よ美持と載ておは例よ近く討た義士
叔と取て載て美持相と相と内義士首の美持乃礼は
一も余の首乃隔らば一候せしは屍と候る時一巻色
乃厚風は厚く蒲室よ出陣と包と美持よ幕乃内
よ美持入又美持蒲室と美持は始乃てく美持よは屍
枝よ叔め小は旗よ此美持書一枝乃よ美持は相
家の作法小美持ありとひとと大際よ美持は美持して
ある一事の御細なるよ美持は美持は美持は
大石の義士は美持 元年也 相者 安場市平
吉田は美持の美持 六十 増田は美持

中村幼介 正辰 四十八

菅谷半之丞 辰利 四十四

本村國右衛門 辰行 四十六

千馬三之丞 清光 忠 三十一

園新合右衛門 包秀 三十一

貝原孫左衛門 友信 五十四

大島源六 忠雄 三十一

石坂数右衛門 正種 三十四

己上十人

毛利家 檢使 渡者 考数 古日

大浦半平

加藤秀右衛門

三原久右衛門

波賀清右衛門

加藤秀右衛門

大浦半平

三原久右衛門

荒川十右衛門

檢使 行目付 鈴木次郎右衛門 行俊 兼 斎友 次郎右衛門 和神部
十右衛門 若林六右衛門 小山十郎右衛門 若林三右衛門 竹田守部

己上八人 長坂彦八 尾川利助 大田与右衛門 高橋平次郎 飯沼
行徳 目付

志二部 小入目付 切腹 少牙 実持 伴法久 松家 同家
相者

園崎八右衛門 常樹 三十九 相者 近藤右衛門

右田得右衛門 善定 二十九 相者 轉阿宗右衛門

武林 唯七 隆重 三十七 相者 柳 政右衛門

倉橋傳助 武幸 三十四 相者 田上久右衛門

村松玄左衛門 秀忠 三十九 相者 江波清右衛門

杉野十平次 治房 二十八 相者 近藤右衛門

勝田新左衛門 武光 二十八 相者 轉阿宗右衛門

前原保介 宗房 四十一 相者 柳 政右衛門

小野寺重吉 宗吉 二十八 相者 江波清右衛門

間新六 光周 二十四 相者 田上久右衛門

赤城義房傳卷之十三目次

曰候義房義人傳卷并漢田横が事

法士競教義古事物語并義古勇功傳子傳の事

吉良武場福源并義古男子流傳の事

院とゆはる建慈石お陽光院并傳抄の事

義古男子傳教先并院と勅化の事

追加

良雄寄故郷の傳書傳の事

赤城山城伝巻十三

日使築城古墳墓 赤城山横田様之事

去程より日箇乃候に義士が遺骸と泉岳寺より遺儀
城施し守り給と仰せ修せらるる事其後又十枚細川家白
紙又十枚久松家白紙二十枚毛利家白紙二十枚水野家白紙
泉岳寺の所ある三百人の傍々集めて薦技のけりやと
三枚とぞ用せらるる儀又津島に日十六人と三ツ又日して
法号信忠と記し墳墓ハ山門のたよるく山後と云ふ
矩の家より勝守一郭と稱し跡より日箇乃候家より居地と
建立しそのを遺跡後世よりおろく條列築くとして
一天の明候てし威風凛然として甲冑とのふり多
乃平蔵の引と切に感涙を流し居し一帯の守り多し

元祿五年己歲
三月十日卯
儀

淺野氏西園寺家大納言兼
忠誠院 又空淨叙居士
元祿六年正月四日行重臣

吉田忠孝門兼亮
又仲光叙信士

原宗右衛門元辰
又峰山叙信士

行國源秀房
又勘西女叙信士

間瀬久太夫正明
又譽道叙信士

小野寺十内秀希
又以申叙信士

問喜共衛光延
又泉如叙信士

又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士

又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士

又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士
又德元叙信士

又周未叙信士
又毛知叙信士
又階雷叙信士
又勇相叙信士

又梅叙信士
又可仁叙信士
又雲霞叙信士
又補天叙信士
又風城叙信士

又大叙信士
又野叙信士
又水叙信士
又野叙信士
又野叙信士
又野叙信士
又野叙信士
又野叙信士
又野叙信士
又野叙信士

又上叙信士
又雲遇叙信士
又露白叙信士
又水流叙信士
又觀植叙信士
又道互叙信士
又通增叙信士
又四逸叙信士
又電石叙信士
又無一叙信士

元弘の討ひに、やと、り、は、ま、ま、及、公、裁、有、り、と、院、の、法、
 一、任、を、ま、具、公、集、り、茶、湯、料、は、元、一、と、作、か、ら、あ、び、り、あ、る、
 府、中、一、は、隆、平、の、ま、ね、れ、る、武、士、然、と、し、と、衆、あ、ち、よ、来、
 了、佩、刀、の、下、陰、を、刀、價、以、御、せ、び、買、取、り、り、よ、り、又、武、人、
 ち、中、は、飛、集、り、と、さ、ら、る、市、の、ど、こ、刀、一、揚、と、二、十、人、三、十、
 人、陰、一、と、三、十、人、又、十、人、を、白、徒、と、の、武、士、り、ら、と、事、あ、く、
 之、と、買、取、り、り、と、さ、ら、る、一、周、を、ま、ま、後、と、御、下、軟、弱、は、
 か、ち、意、定、の、深、津、公、糾、切、し、て、之、は、故、け、り、る、後、ま、衣、被、と、
 裁、切、帯、を、持、や、り、の、物、は、取、く、一、寸、二、寸、づ、裁、り、之、は、切、て、
 ま、ん、と、ゆ、り、の、後、よ、今、長、古、の、佩、刀、の、痕、と、り、く、ま、東、の、戦、
 功、以、御、せ、り、と、証、ア、武、膚、が、三、尺、乃、佩、刀、を、取、り、の、形、
 勢、完、然、鑑、子、の、ど、こ、毛、や、ん、流、ら、乃、白、徒、と、り、一、三、尺、乃、切、と、

も、い、つ、が、一、又、奥、田、の、武、士、が、三、尺、三、寸、乃、刀、又、刀、に、か、れ、り、
 る、筋、乃、ど、く、惟、準、隆、平、が、長、短、と、い、ふ、と、を、用、意、あ、り、
 又、勝、ら、じ、や、そ、の、不、破、心、體、大、き、た、能、成、林、隆、平、中、村、心、衣、
 御、回、る、教、を、お、れ、り、重、信、が、佩、刀、も、又、大、な、掛、り、り、ま、ま、武、林、
 隆、平、の、故、人、ま、ま、隆、平、の、歴、史、を、う、り、く、之、が、屍、と、し、り、
 ん、の、後、孫、が、い、と、り、と、口、角、の、法、信、り、教、を、候、て、り、衆、
 ち、人、集、ら、る、一、ち、く、ま、の、中、に、り、ら、る、あ、ま、さ、り、衆、あ、る、入、
 立、然、へ、隆、平、が、權、威、を、ま、ま、さ、ら、く、さ、包、は、收、め、り、衆、り、武、林、
 が、佩、刀、と、令、は、移、り、衆、を、ま、ま、隆、平、の、時、に、隆、平、者、一、は、常、に、あ、ん、
 て、任、侠、と、事、と、し、刑、は、隆、平、に、相、成、林、政、太、右、の、一、本、を、取、り、後、
 頭、あ、り、の、隆、平、の、首、を、持、り、て、教、を、自、ま、り、て、日、心、隆、平、は、
 頭、心、の、首、を、持、り、て、教、を、自、ま、り、て、日、心、隆、平、は、



卷之三

本村宗十郎 園七郎の子 年九女

大志郎 宗十郎の子 年九女

弟中 宗十郎の子 年九女

真田 宗十郎の子 年二女

村松 宗十郎の子 年二十三女

政右衛門 宗十郎の子 年二十三女

矢田 宗十郎の子 年九女

高橋 宗十郎の子 年十女

高橋 宗十郎の子 年八女

年二十九人

院之 宗十郎の子 年九女

又と宗十郎の子 年九女

宗十郎の子 年九女

桂花 宗十郎の子 年九女

思卿 宗十郎の子 年九女

元禄十六癸未二月 大石内藏介藤原良雄

瑞之院

判

宗十郎の子 年九女

赤城義信傳附錄卷之十四目次

大義論たいぎろん

淺草系圖あさのけいず

大石系圖おおいしけいず

必殺士台根ひっせつしだいこん

必殺士台根

赤松義長傳附録卷之十

大義論

或説は上より下へ一をせらるる也と下より上へ人
乃教しりて言はく上より下へと云ふは其の意は
全くとて後くは先づ人乃志は進んで居るのみ
て何方へも指すは一毛拂と云ふは又其の意は
徳候も其の意は毫厘も上りて其の意は
れは其の意は其の意は其の意は其の意は
と進んで居る上りて後くは其の意は其の意は
と云ふは其の意は其の意は其の意は其の意は
唯公儀大禮は其の意は其の意は其の意は其の意は
は其の意は其の意は其の意は其の意は其の意は

大義論

一

